

特集

土木史研究の今 —強まる社会との関わり—

Current status of historical studies in civil engineering
—deepening involvement with society—

特集担当主査：西山孝樹
特集企画担当：鈴木春菜、林昌弘

土木史研究といえば、「歴史ある土木構造物の建設経緯やそこで用いられた技術、材料を明らかにする」学問であると思われ、読者も多いのでは

ないだろうか。もちろん、それは土木史研究にとって大きな柱であり、決して揺らぐことはない。しかし、土木史研究は多様な広がりを見せている。特

に今日では、従来のイメージを払拭するような新しい芽も各地でいぶき始めている。このような土木史の新たな動向を皆様を知っていただくとうと思いい、本特集を企画した。

第四に、歴史研究の成果を社会へそして未来へ還元する、本学会員が関わる取組みを紹介したい。まずは、軍艦島3Dプロジェクトを通して、土木遺産を含む産業遺産を活用した観光まちづくりについて、長崎大学・出水享氏に紹介いただいた。次に、戦後から高度経済成長期にかけて建設された大量の土木施設の歴史的・文化的価値の評価に向けた動きを日本大学・阿部貴弘先生から報告いただいた。言うまでもないが、土木史研究を普及させ、教育へ取り入れていくことも社会への還元である。立命館大学・林倫子先生に若手研究者の立場から、土木工学における歴史を学ぶ意義やその面白さについて述べていただいた。また、岐阜大学・出村嘉史先生に、同大

第一に、これまでの土木史研究の動向を知っていただくため、社会へ向けて行ってきた土木史研究委員会の活動、学会で発表されてきた論文の傾向について、本特集の担当委員を中心にまとめた。

第二に、昨年の11月に土木史研究委員会が主催した第1回土木史サロンの要旨を紹介する。「土木の歴史に学び、現在、そしてこれからの社会を考える」をテーマに、東京大学・高橋裕名誉教授の示唆に富む特別講演、土木史や社会コミュニケーションに関わりの深い有識者を交えたパネルディスカッションの模様をお伝えする。

第三に、他分野の研究者が土木史研究に期待する視点や取組みについて執筆いただいた。まず、印刷博物館館長（東京大学名誉教授）の樺山紘一先生に中世ヨーロッパにおける政治史や社会史のなかで土木史の位置づけを述べていただいた。次に、和歌山県立博物館・前田正明先生は、津波で亡

くなった人びとの名が刻まれた位牌や津波警告板の調査活動に取り組まれており、土木史研究との協働に向けた可能性を探っていただいた。

本特集を通じ、土木史研究の意義や動向について、理解を一層深めていただければ幸いである。

Speaking of Historical Studies in Civil Engineering, most readers might picture it as an academic field that clarify how the historic civil structures were constructed and what technology and materials were used. No doubt they are absolutely major pillars of historical studies in civil engineering; however, a wider variety of historical research in civil engineering is emerging. In particular, at the present time new movements which try to change the traditional image have started to take place in various places. This special issue is designed to introduce the new trends of historical studies in civil engineering to our readers, and it is our intention that readers can have a deeper understanding of the significance and trends of historical studies in civil engineering.

写真1 ポルトガルの「ムーアの城跡」と眼下に広がるシントラの市街地（撮影：西山孝樹）首都リスボンから北西へ約20km。シントラのまちには、8世紀頃に築かれた城跡、ポルトガル王室が夏の離宮として建造した宮殿などが点在する。ヨーロッパ諸国の政治史や社会史では、社会基盤施設に関する史実が明らかになっていない部分が数多く残るという。土木史研究の視点を加えることで、新たな発見があるかもしれない。